



何かを好きである、ということと、それを表現できることは全く別物です。もうすぐ始まる冬季オリンピックでも、各国の素晴らしい選手が世界の舞台で最高のパフォーマンスを世界中に見せてくれることなのでしょう。その選手たちも、はじめはその競技が好きで好きでたまらなくて、取りつかれたようにそのことばかりやっていたことなのでしょう。それがいつしか、高みに上るにつれ苦しくて、先の見えない世界に入ってしまう、と言います。でも、好きだからこそ、そこから出ていくことができます。その先の見えないトンネルをくぐりぬけた先に素晴らしい世界が待っていることが分かっているからです。

よく、絵画や音楽の芸術家も、楽しんでやっているうちは本物じゃない、と言われる。絵を描くことが楽しくなくなった、と周囲に打ち明けると、おめでとうと声をかけられる、ということです。苦しい過程を経て創作することが、人の心に残る作品につながります。

好きなことをしている人はキラキラ輝いています。そんな人を見るのはとても楽しいものです。冬季オリンピックでもそんな選手たちの活躍を目の当たりにして、自分たちも達成感や充実した気持ちを得ることができます。選手たちのその背後にたくさんの努力や苦しみを見ることはできても、それを本当に味わうことはできません。少しでも理解するためには、同じ苦しみを体験するか、そんなことが不可能ならその体験をした人の本を読んで追体験するしかないのです。

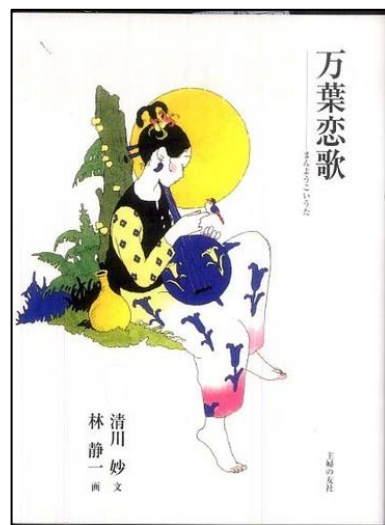
『万葉恋歌』におもう

国語科 花本麻冬

私が読書をしていてとりわけ面白いと思うのは、筆者の「好き」という情熱が伝わってくる作品です。エッセイはもちろん、評論でも小説でも、とにかく筆者が夢中になっているものへの「好き」という気持ちがあふれている作品ほど、読んでいてわくわくするものはありません。今まであまり知らなかったことであっても、筆者の「好き」が伝わってきた結果、自分もそれに興味を持って、関連作品を読むこともあります。こうやって世界が広がっていくことが、読書の楽しさの一つだと思います。

さて、私が今回紹介する作品も、筆者の「好き」という気持ちにあふれています。『万葉恋歌(清川妙)』は、タイトルからもわかるように、万葉集の恋の歌について書かれた作品です。筆者の清川妙さんは、学生時代から万葉集が大好きで、大人になってからも万葉集の勉強を続けています。私も万葉集は好きですが、筆者の「万葉集が好き」という気持ちの大きさにはとてもかないません。それくらい、万葉集への情熱に満ちた作品です。

「好き」が「つながる」『万葉恋歌』花本麻冬



『万葉恋歌』では、数ある万葉集の歌の中から、恋の歌ばかりを取り上げて解説しています。ただ単純にその歌の技法やエピソードについて説明するのではなく、筆者なりの解釈を踏まえた訳と、筆者がその歌のどの部分を気に入っているのかまで書かれているのが特徴です。

私が万葉集の中で一番好きな歌についても、詳しく取り上げられていました。

「あかねさす紫野ゆき 標野ゆき 野守は見ずや 君が袖振る」

これは、近江の国で遊猟が催された際に、額田王という女性が詠んだ歌です。「君」は額田王のかつての恋人である大海人皇子を指しています。袖を振ることは「あなたを愛しています」というジェスチャーだそうです。額田王は、この歌を詠んだ時点ですでに別の人物の妻となっていました。つまり、かつての恋人の行動に対して、喜びだけを感じるわけにはいかないのです。

筆者は、その複雑な心情が歌のリズムからも伝わってくると述べています。「あかねさす、むらさきのゆき、しめのゆき……。朱赤のいろや紫のいろが、あなたのまぶたの裏にきらめき揺らぎ、恋のリズムがあなたを酔わせるでしょう。のもりはみずや、きみがそでふる。下の句は一転して、その恋の激しさを自分の中に閉じこめなければならぬ、せつないためいきが聞こえるよう……。」筆者の解説は、どれもこのようにロマンティックで素敵です。理屈だけの解説よりも、万葉集の魅力が余すところなく伝わってきます。

実はこの歌は、宴会の席で冗談として詠んだ歌だともいわれているものです。中年になっているのに、これほど燃える恋の歌を詠むはずはないという説もあります。しかし、筆者はそれらを否定します。万葉の歌人たちは、年をとってもその胸の中に青春をたたえており、みずみずしい恋の泉をけっして涸らしてはいなかった、ということです。もしかすると、筆者は万葉集のそのような部分に惹かれているのかもしれませんが。

挙げるときりがありませんが、『万葉恋歌』ではこのようにさまざまな歌について、恋する人間の感情や様子などを、筆者の思いも含めて説明しています。わかりやすく丁寧な解説で、万葉集に詳しくない人でも楽しめる内容です。何よりも、筆者がどれほど万葉集を好きなのが、本文中のあらゆるところから感じられます。私は『万葉恋歌』を読んで、もともと好きだった万葉集をさらに好きになることができました。

今回紹介した作品は万葉集について書かれたものですが、もちろん他のものでも構いません。ぜひ、筆者の「好き」という情熱が伝わってくる作品を探してみてください。きっと、自分の世界を広げることができるはずです。